

角化嚢胞性歯原性腫瘍

大阪歯科大学口腔病理学講座

和唐雅博

角化嚢胞性歯原性腫瘍は、1992年のWHOの分類では歯原性角化嚢胞性の名称で嚢胞に類されていたが、2005年のWHOによる組織分類では歯原性腫瘍として分類された。

好発年齢は20～30歳代で下顎の大白歯部に好発し、顎骨を侵襲性に破壊し増大する。X線的には、単房性あるいは多房性の透過像を示す。病理組織学的には、基底細胞は明瞭で立方形あるいは円柱状の細胞からなり、柵状配列も認められる。裏装上皮は、通常数層からなる錯角化重層扁平上皮で、表面が波形を呈し上皮突起を欠いた平坦な基底面からなる。嚢胞壁の結合組織中には、歯原性上皮島や娘嚢胞もしばしば認められ、手術時に取り残されることにより再発することがある。二次的に炎症を伴うと上皮は肥厚し上皮突起を形成するようになり、角化層も消失する場合がある。また、基底細胞母斑症候群では、皮膚の基底細胞癌を合併し、本嚢胞が顎骨内に多発する。しかし、正角化重層扁平上皮で裏装されている場合は、この範疇には入れないとされている。

鑑別疾患は、エナメル上皮腫、歯根嚢胞や含歯性嚢胞を始めとする顎骨に発生する嚢胞などが挙げられる。とくに単嚢胞性のエナメル上皮腫は、臨床的に鑑別が困難であるが、病理組織学的には嚢胞の裏装上皮層にエナメル器様の構造や上皮下の硝子化が認められる。また、角化嚢胞性歯原性腫瘍では、X線的に埋伏歯の歯冠を含む像を示し、含歯性嚢胞との鑑別が問題となるが、含歯性嚢胞の裏装上皮は薄い非角化重層扁平上皮あるので鑑別は容易である。歯根嚢胞の原因歯は失活歯で、その歯根が嚢胞腔内に含まれ、上皮は非角化重層扁平上皮で裏装され、上皮下には炎症性の肉芽組織がみられる。肉芽組織内や嚢胞腔内にはしばしばコレステリン結晶や異物巨細胞が認められる。しかし、遷延化したものでは上皮は菲薄化してくる。以上のことから、角化嚢胞性歯原性腫瘍は、嚢胞性疾患と区別は比較的容易である。